

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和 7 年度病虫害発生予報第 7 号 (10 月) について

このことについて、病虫害発生予報第 7 号を発表したので送付します。

予報第 7 号

10 月における主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	現 況 (発生量)	10 月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
大豆	ハスモンヨトウ 吸実性カメムシ類	少 やや多	並 やや多	少 並
かんきつ	ミカンハダニ	並	並	並
かき	炭疽病 フジコナカイガラムシ	並 やや少	並 やや少	並 並
果樹共通	果樹カメムシ類	並	— 注 3)	やや多 注 3)
イチゴ	うどんこ病 炭疽病 ハダニ類	並 やや少 少	並 並 並	並 並 並
冬春ナス	ミナミキイロアザミウマ	やや多	やや多	やや多
野菜共通	ハスモンヨトウ オオタバコガ コナジラミ類	少 並 注 4) 並 注 4)	並 やや多 注 4) やや多 注 4)	少 並 やや多

注 1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去 10 年間）及び参考として前年との比較で、
「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。

注 2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病虫害の発生条件を必要に応じて記載しています。
それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

注 3) 果樹共通・果樹カメムシ類の発生量は年次間変動が大きいので、前年比としています。

注 4) 野菜共通・オオタバコガおよびコナジラミ類において、調査年が 10 年に満たない場合は調査地点の調査開始年～2024 年までの平均値を平年としています。

<予想される向こう1か月の天候（令和7年9月27日～10月26日）>

向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高く、期間の前半はかなり高くなる見込みです。湿った空気や前線の影響を受けやすい時期があるため、向こう1か月の降水量は平年並か多いでしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

九州北部地方	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低10 並10 高80% 平年より高い見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い見込み	少40 並30 多30% ほぼ平年並の見込み

（福岡管区気象台 令和7年9月25日発表1か月予報より抜粋）

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス

URL: <https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo.html>
または右QRコード①

①⇒



○X（旧Twitter）で定期情報や注意報等発出のお知らせをしています。

Xの本アカウント（福岡県農作物病害虫情報）へのアクセス

URL: https://x.com/PPDPO_Fukuoka または右QRコード②

②⇒



【普通作物：大豆】

1 ハスモンヨトウ

（1）予報の内容

発生量：平年並、前年より少

（2）予報の根拠

ア 9月5半旬の調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

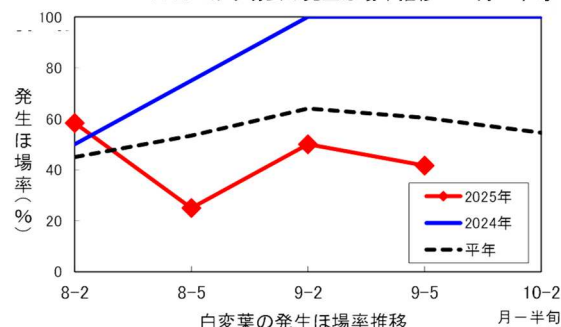
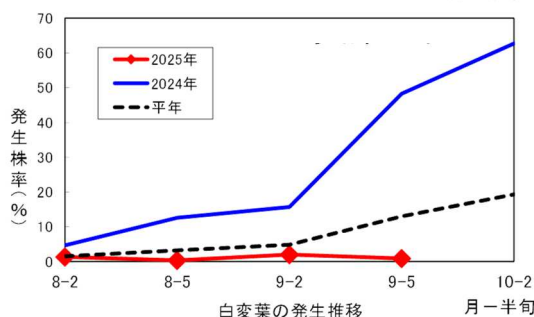
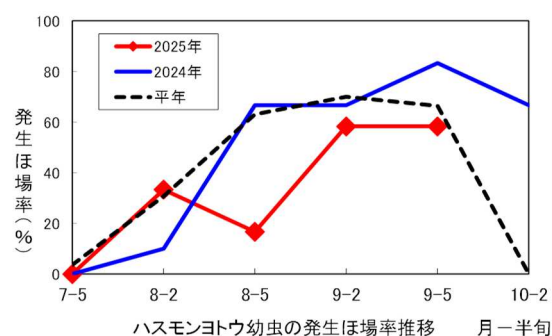
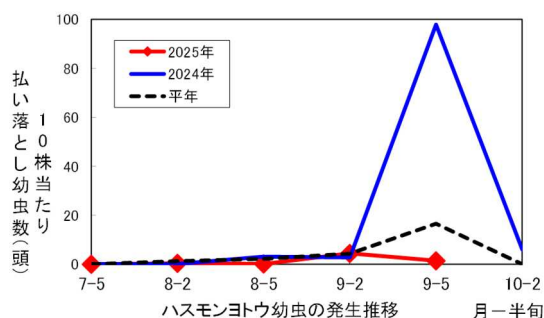
10株当たり払落とし幼虫数 1.4頭（平年 16.6頭、前年 97.9頭）

発生ほ場率 58.3%（平年 66.4%、前年 83.3%）

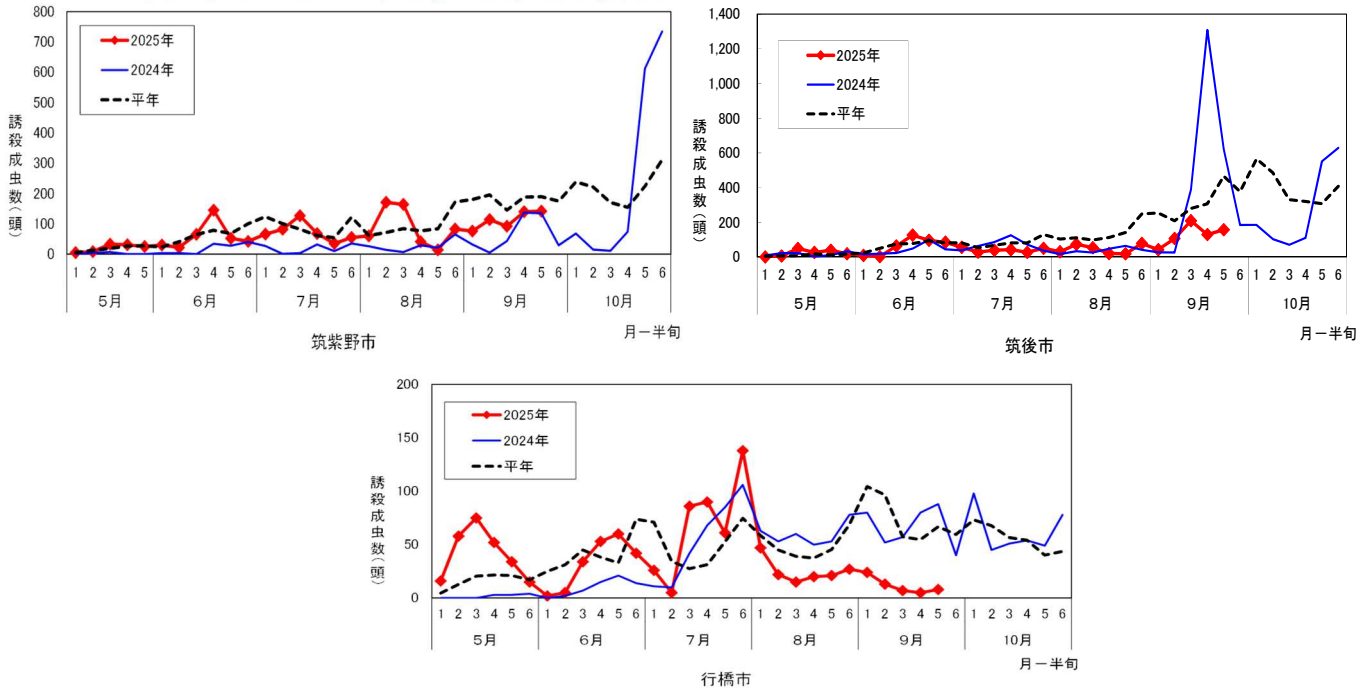
イ 9月5半旬調査の結果、白変葉の発生量は平年より少なかった（－）。

白変葉発生株率 0.88%（平年 13.0%、前年 48.3%）

発生ほ場率 42.0%（平年 60.4%、前年 100%）



ウ 9月1半旬～5半旬のフェロモントラップにおける誘殺成虫数は平年より少なく推移した（－）。
エ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。



フェロモントラップにおけるハスモンヨトウの誘殺虫数の推移

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。
- イ 中齢幼虫になると薬剤の効果が低下するため、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに薬剤防除を実施する。
- ウ フェロモントラップを活用した防除適期の目安は、誘殺ピークから10日目頃であるが、地域によって誘殺消長に差があるため、必ずほ場で発生状況を確認し、防除する。
- エ 今後の発生状況については、病虫害防除所のホームページを参照する。
<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.html#daizu-yasai>
- オ 一部の薬剤においては、薬剤感受性の低下が懸念されることから、薬剤の選定に留意する。また、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布する。
- カ 農薬の使用および散布等にあたっては、最終頁の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病虫害についても同様）。

2 吸実性カメムシ類

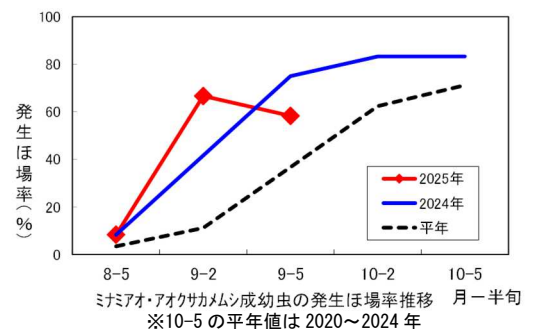
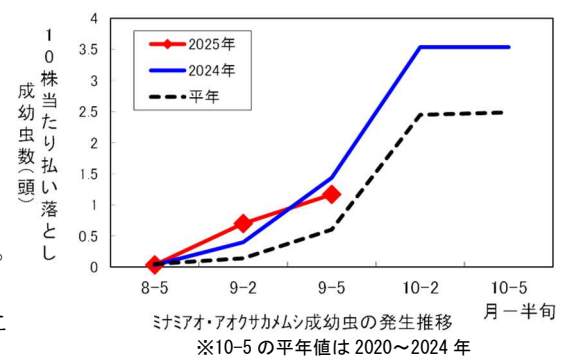
(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

- ア ミナミアオカメムシの県下5か所の予察灯における
9月1半旬～3半旬の誘殺虫数は平年より多かった（＋）。
177頭（平年 69.5頭、前年 170頭）
- イ 9月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～＋）。

- ・ミナミアオカメムシ・アオクサカメムシ
10株当たり払い落とし虫数 1.2頭
(平年 0.6頭、前年 1.4頭)
発生ほ場率 58.3% (平年 36.7%、前年 75.0%)
- ・ホソヘリカメムシ
10株当たり払い落とし虫数 0.2頭
(平年 0.1頭、前年 0.2頭)
発生ほ場率 25.0% (平年 19.2%、前年 41.7%)

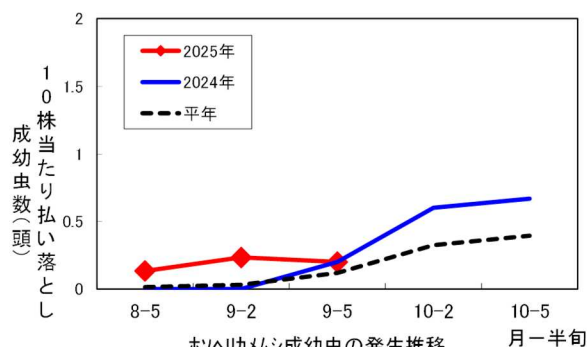


・イチモンジカメムシ

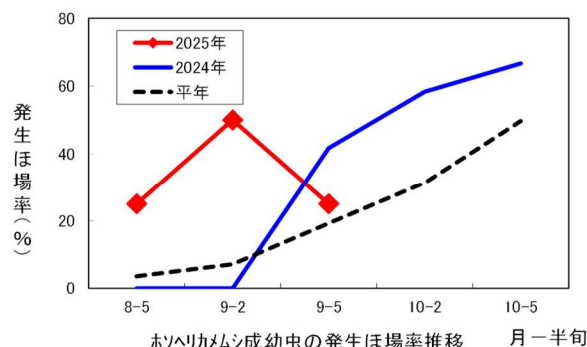
10株当たり払い落とし虫数 0.4頭（平年 0.1頭、前年 0.23頭）

発生ほ場率 41.7%（平年 14.7%、前年 41.7%）

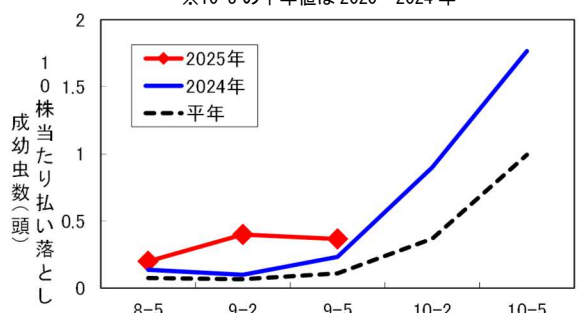
ウ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。



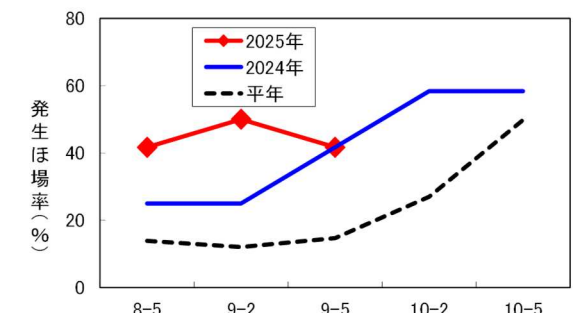
※10-5の平年値は2020～2024年



※10-5の平年値は2020～2024年



※10-5の平年値は2020～2024年



※10-5の平年値は2020～2024年

(3) 防除上注意すべき事項

ア 吸実性カメムシ類による被害は低密度でも品質に及ぼす影響は大きく、幼莢期から子実肥大期にかけての被害が著しいので、開花期 30 日前後（9 月中旬～下旬）とその後 7～10 日後に 2 回目の防除を行う。

イ 薬剤散布を行う場合には、薬剤が着莢部によくかかるよう丁寧に散布する。

ウ カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。

エ ミナミアオカメムシは、例年 9 月下旬～10 月上旬にかけて発生量が急増するので、発生状況には十分注意する。

【果樹：かんきつ】

1 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 9 月 5 半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

寄生葉率 1.4%（平年 2.5%、前年 0.1%）

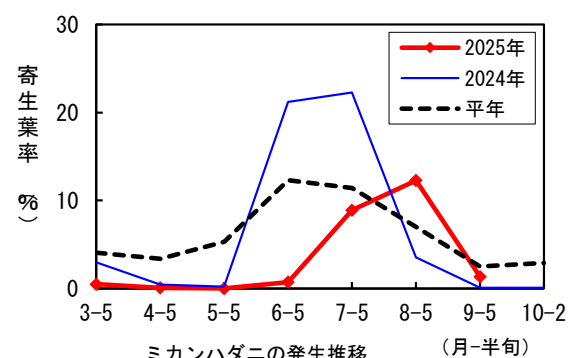
発生ほ場率 36.4%（平年 27.6%、前年 9.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果実に寄生が認められる場合は、薬剤防除を実施する。

イ 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。また、薬剤感受性の低下を避けるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病果率 0.24%（平年 0.29%、前年 0.15%）

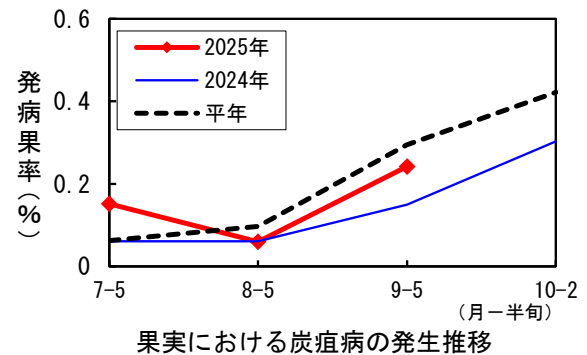
発生ほ場率 27.3%（平年 25.2%、前年 27.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 降雨が続いた場合や、前年発生が多かった園では薬剤防除を実施する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-～±）。

寄生果率0.6%（平年 9.0%、前年 0.9%）

発生ほ場率36.4%（平年 76.0%、前年 36.4%）

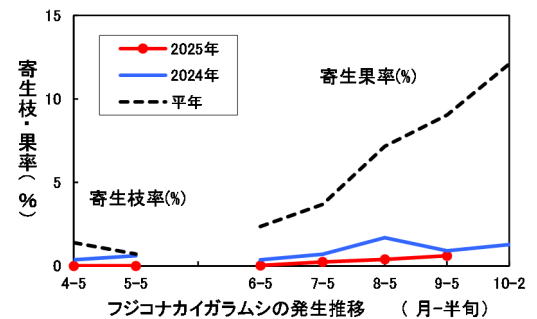
イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（-～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果樹カメムシ類の防除等で、カイガラムシ類の

天敵に影響のある薬剤を使用する際は、フジコナカイガラムシに効果のある薬剤を選択する。

イ 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、散布むらがないよう十分量の薬液を丁寧に散布する。



【果樹共通：果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ他）】

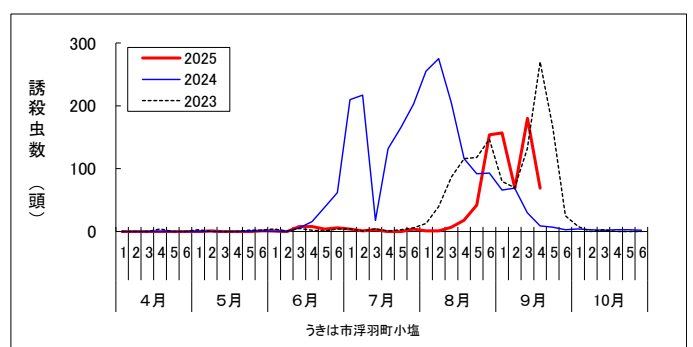
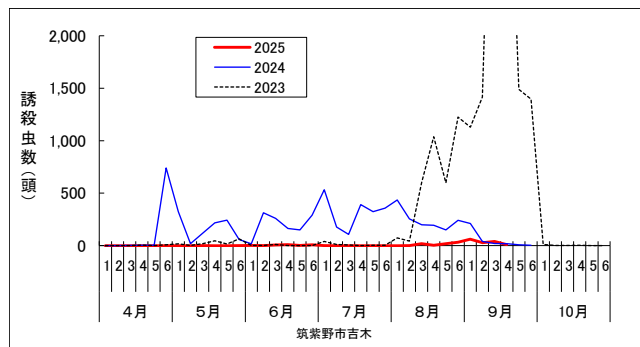
(1) 予報の内容

発生量：前年よりやや多、過去10年間の発生量と比して並

(2) 予報の根拠

ア チャバネアオカメムシの8月4半旬～9月4半旬までの予察灯における誘殺成虫数は、前年並で、過去10年比でも並発生であったが、久留米地域ではやや多かった（±）。

予察灯（4か所）平均：493頭（前年411頭、過去10か年平均318頭）

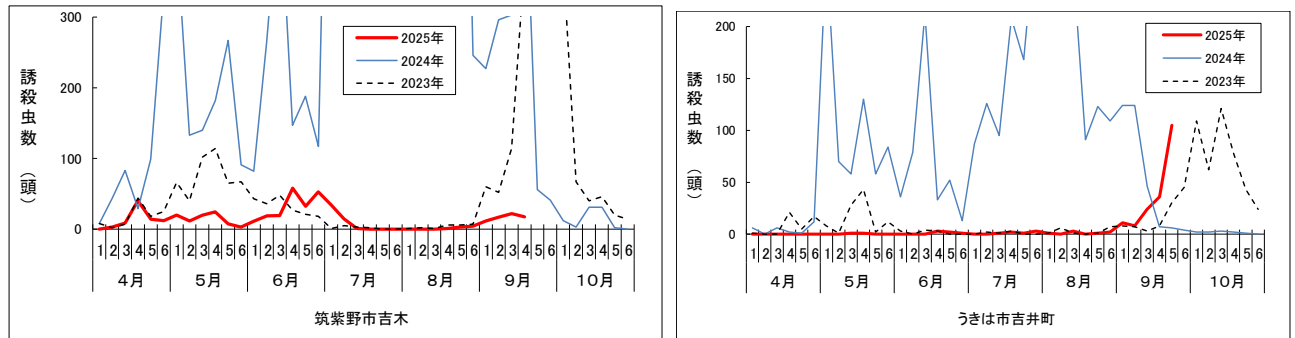


予察灯におけるチャバネアオカメムシの誘殺成虫数の推移

※予察灯の他定点の状況については、病害虫防除所ホームページを参照

イ チャバネアオカメムシの8月4半旬～9月4半旬までのフェロモントラップにおける誘殺成虫数は、前年より少なく、過去10年比でも少発生であったが、久留米地域ではやや多かった（－～±）。

フェロモントラップ（3か所）平均：44頭（前年1,714頭、過去10か年平均360頭）



フェロモントラップにおけるチャバネアオカメムシの誘殺虫数の推移

※フェロモントラップの他定点の状況については病害虫防除所ホームページを参照

ウ 9月2半旬におけるヒノキ球果ピーティングによる果樹カメムシ類の捕獲成幼虫数は、前年より多く平年並（±）、幼虫比率は、前年・平年よりやや少なかった。（－～±）。

平均捕獲成幼虫数：9.5頭（平年8.6頭、前年 1.1頭）

幼虫比率：15.0%（平年 34.5%、前年 26.7%）

エ 9月5半旬のヒノキ球果の1球果当たりの口針鞘数（14地点平均）は前年並で、ヒノキからの離脱の目安である25本/球果には達していない。誘殺状況及び成虫比率・口針鞘数から、地域によってはヒノキから離脱し始めていると考えられる。

9月5半旬のヒノキ球果の1球果当たりの口針鞘数平均：19.0本（前年 17.8本）

朝 倉 地 域：19.7本/果 ⇒ 10月上旬頃の離脱と考えられる。

久 留 米 地 域：24.3本/果 ⇒ 10月上旬現在、既に離脱したと考えられる。

筑 後 地 域：22.4本/果 ⇒ 10月上旬現在、既に離脱したと考えられる。

県 北 地 域：13.7本/果 ⇒ 地域差はあるが、10月中下旬頃の離脱と考えられる。

※県下14地点の定点調査結果はホームページ参照

オ 9月5半旬調査の結果、かきでの被害果率は平年よりやや少なかった（－～±）。

被害果率 0.4%（平年 1.2% 前年 1.4%）

発生ほ場率 54.5%（平年 53.7% 前年 90.9%）

カ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。

（3）防除上注意すべき事項

ア 果樹園への飛来時期は地域差が大きく、同一園内でも被害の発生は偏りがあるため、園内全体を注意して見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。

イ 広範囲に移動するため、薬剤散布は広域一斉防除の効果が高い。

ウ 降雨があると薬剤の残効が短くなるので、散布間隔に注意する。

エ カイガラムシ類などの天敵に影響のある薬剤を使用する際は、該当する害虫にも効果のある薬剤を選択する。

【野菜：イチゴ】

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 0%（平年 0.1%、前年 0%）

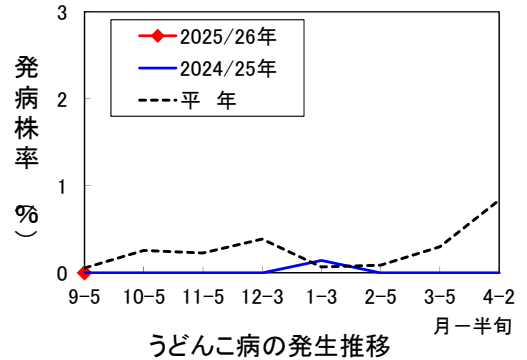
※定植時期のため欠測あり

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 不要な下葉は早めに除去する。薬剤防除は下葉かぎ後に行うと効果的であり、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

イ ビニル被覆後は発生が多くなるため、被覆前までに重点的に防除を行う。なお、薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は地域により差があるが、平年よりやや少なかった（-～±）。

発病株率 0.08%（平年 0.23%、前年 1.1%）

※定植時期のため欠測あり

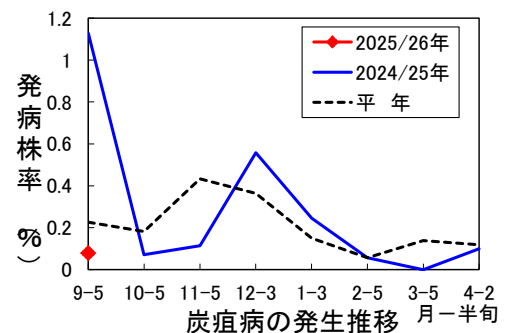
イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗ほで炭疽病の発生がみられた場合は、苗の潜在感染のおそれがあるため本ぼでの発生状況に十分注意する。

イ 発病株は、残渣を残さずに周囲の土ごと掘り取り、速やかにほ場外に持ち出し処分する。

ウ 하우스内の排水を図り、多湿にならないようにする。



3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

寄生株率 0%（平年 1.6%、前年 1.1%）

※定植時期のため欠測あり

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

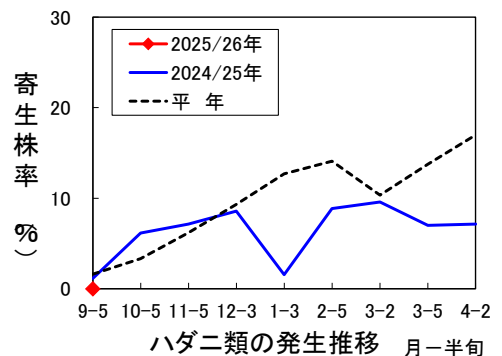
ア ビニル被覆後は発生が多くなるため、被覆までに重点的に防除を行い、初期密度を低下させる。

イ 薬剤感受性の低下を防ぐため、気門封鎖剤も利用し、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

ウ ハダニ類に登録のある薬剤の多くは浸透移行性が乏しいため、葉裏に薬液が十分付着するよう防除を行う。マルチ被覆時の摘葉後に、防除を行うと効果的である。

エ 化学薬剤だけでは防除が困難であるため、天敵を利用した総合的防除を積極的に実施する。

<県ホームページ掲載の「令和7年度版病害虫・雑草防除の手引き」-「IPMの推進」-「イ



チゴの IPM マニュアル」参照＞

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/bojonotebiki.html>

オ 親株用の苗や補植用の余り苗についても防除を怠らない。

【野菜：冬春ナス】

1 ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、一部ほ場で多発し、発生量は平年よりやや多かった（±～+）。

寄生葉率 4.6%（平年 1.8%、前年 0.9%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

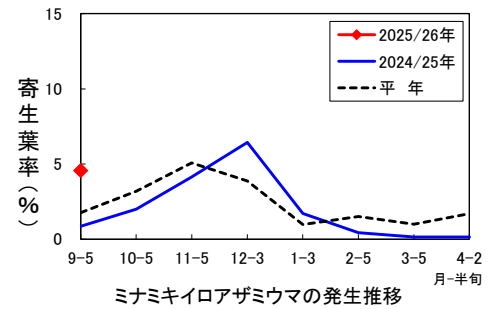
ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ 防虫ネットを展張し、定期的な薬剤散布を実施する。

ウ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。

エ 薬剤感受性が低下しているため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

オ 化学薬剤だけでは防除が困難であるため、天敵を利用した総合的防除を積極的に実施する。



【野菜共通】

1 ハスモンヨトウ

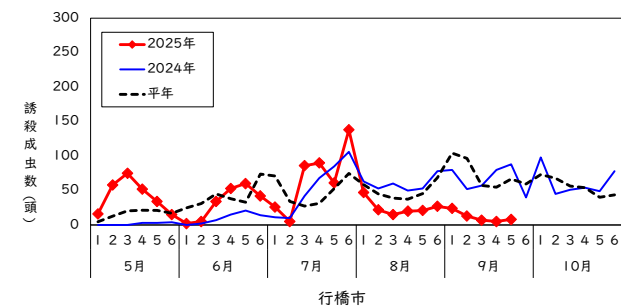
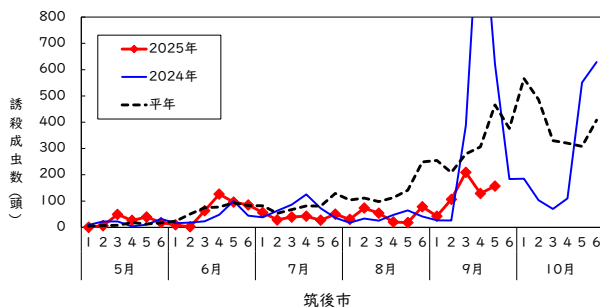
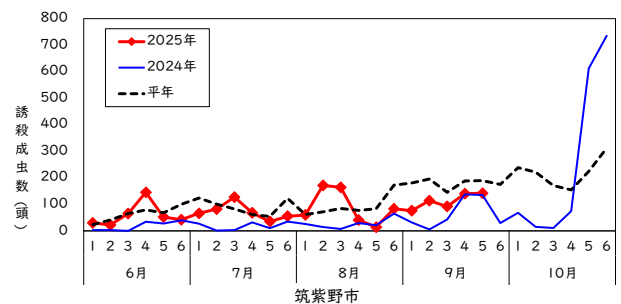
(1) 予報の内容

発生量：平年並・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 9月1半旬～5半旬のフェロモントラップにおける誘殺虫数は平年より少なく推移した（-）。

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。



フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺虫数の推移

(3) 防除上注意すべき事項

ア 地域によって発生量に差があるため、ほ場の発生状況に注意し、発生を確認したら直ちに防除を行う。

イ 薬剤防除は若齢幼虫を対象に実施する。

ウ 一部の薬剤においては、薬剤感受性の低下が懸念されることから、薬剤の選定に留意する。また、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布する。

エ 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。（以下の害虫についても同様）

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.html#daizu-yasai>

2 オオタバコガ

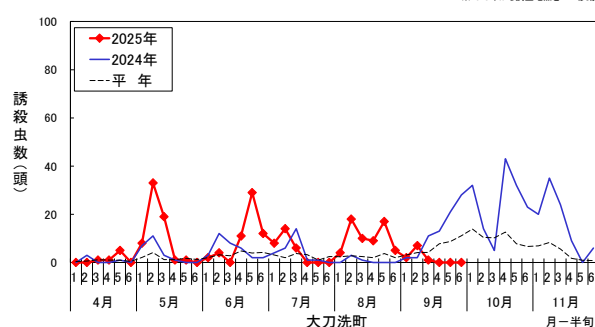
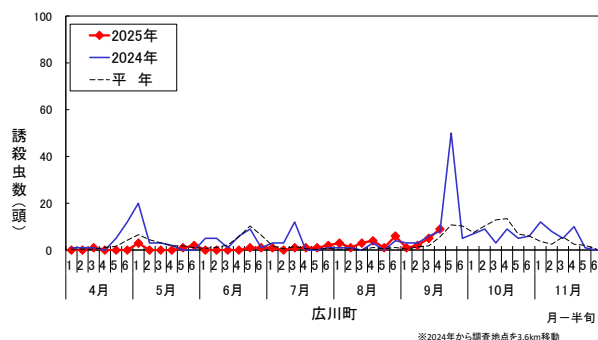
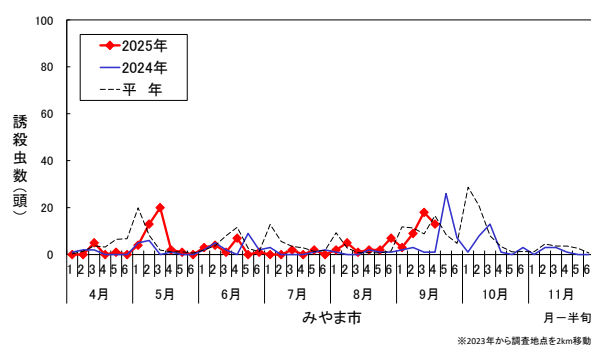
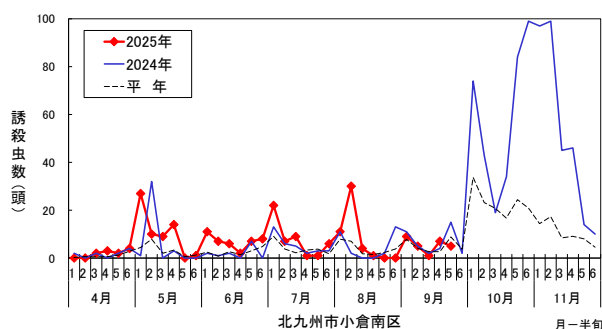
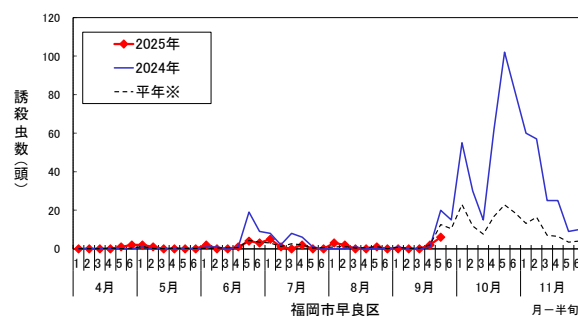
(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月4半旬～9月4半旬のフェロモントラップにおける誘殺虫数は地域により差はあるが、おおむね平年並で推移した（±）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。



フェロモントラップによるオオタバコガの誘殺虫数の推移

(3) 防除上注意すべき事項

ア 地域によって発生量に差があるため、ほ場の発生状況に注意し、発生を確認したら直ちに防除を行う。

イ 薬剤防除は若齢幼虫を対象に実施する。

3 コナジラミ類

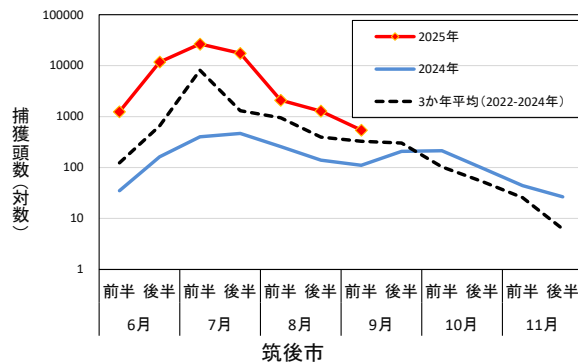
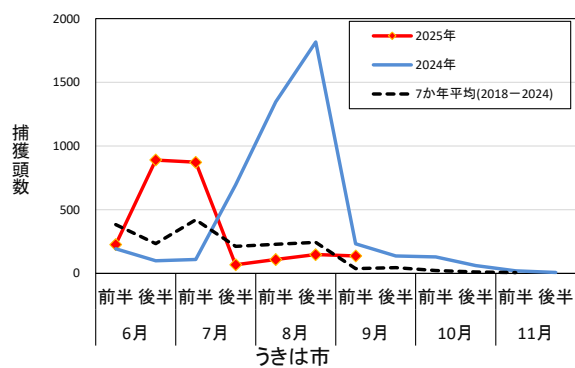
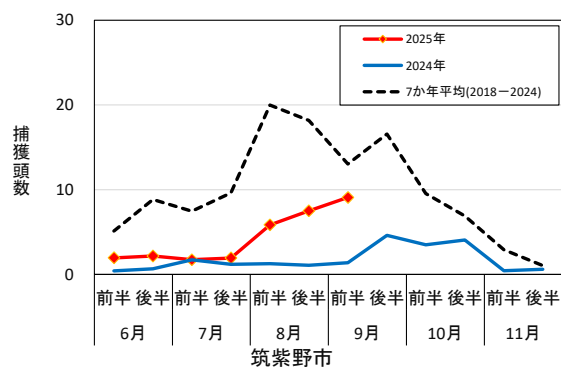
(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月後半～9月前半の粘着板トラップにおける捕獲虫数は地域により差はあるが、平年並で推移した（±）。

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。



黄色粘着板によるコナジラミ類の誘殺虫数の推移

(3) 防除上注意すべき事項

ア 施設内への成虫の飛び込みを防止するため、防虫ネットの目合いは0.4mm以下にする。

イ 施設内側に黄色粘着シートを設置するなど発生状況を把握し、発生を確認したら、薬剤防除を行う。

ウ ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、農薬適正使用の指導を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。使用者の安全はもちろん、周囲の人畜・隣接作物・河川等への配慮についてもご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布は場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

○農薬散布の実施において、周囲の生産者、住民に周知を図る。

3 保護具の着用

○農薬の散布前に、ラベルの注意・警告マークをよく確認する。マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用し、薬液を作成する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄し、残液はほ場外への流出や環境や後作に影響を与えないよう配慮して、ほ場内の農作物が植え付けされていない土壌にまく。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、地域の農業用廃プラスチック適正処理推進協議会が実施する回収や、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは『廃棄物の処理及び清掃に関する法律（廃掃法）』で禁止されているので、絶対に行わない。